

小林信彦

UTTERANCE
TRAINING
Nobuhiko
KOBAYASHI

新潮社

発語 訓練

A Jack-O'-Lantern

Mt. FUJI

An
Alcove
Post

A Goldfish

A
wort

A Low
Dining Table

A pair of
Chopsticks

A Tatami Mat



発語 訓練

小林信彦

新潮社

はつごくんれん
発語訓練

定価 九八〇円



印刷 一九八四年五月一日

発行 一九八四年五月五日

著者 小林信彦（こばやしのぶひこ）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話 業務部 03（266）五一一一 編集部 266（五四一一）

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

©1984 Nobuhiko Kobayashi. Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-331809-0 C0093

発語訓練 ● 目次

W・C・フラナガン 素晴らしい日本野球 7

W・C・フラナガン 素晴らしい日本文化 27

サモワール・メモワール 47

野球につれてつて 71

翻訳・神話時代 93

到達

117

ハーレクイン・オールド

139

いちご色の鎮魂歌

161

嵐を呼ぶ昭和史・抄

185

発語訓練

207

作者ノ
ト

発語訓練

装 装
画 幀
河 平
村 野
要 甲
助 賀

W・C・フラナガン 素晴らしい日本野球

この翻訳の原文“Shōgun's Game”は、ニューヨークの映画研究誌“Cineaste”の一九八〇年五月号（日本映画特集号）に掲載されたものである。同誌編集部からの手紙によれば、筆者のウィリアム・C・フラナガンは、まだ二十代で、日本通をもって任じており、半年まえに日本を訪問したことがあるという。一読したところ、ロバート・ホワイティングの著書『菊とバット』を意識したふしがあり、そのわりに思いちがいが多過ぎるので、訳すべきかどうかをためらったのだが、（わが日本がいかに誤解されているか）を知るための一例として紹介することにした。なお、〈原注〉は誤りがあってもそのまま訳し、あまりにも訳がわからない部分には訳注を付した。総じて、誤りがあまりにもはつきりしているものは、そのままにしておいた。

訳者

日本は野球狂の天国である。

日本の平均的な野球狂の朝は、テレビのプロ野球ニュースを観ることから始まる。このニュースは、前夜遅くに放送されたものの再放送であるが、野球狂たちは朝食であるスシを食べながら、前日のナイト・ゲームのエキサイティングなシーンを味わいなおす。

彼らはテレビを消し、彼らの〈マンション〉〈原注〉の近くで打ち出す百八つの鐘の音をききながら、おのおのの勤めに出る。途中の駅の新聞スタンドでは、数多くのスポーツ新聞を売っており、彼らは好みに応じて、それらの中から一紙または二紙をえらんで買う。日刊のスポーツ新聞がアメリカに存在しないことなど、彼らは知る由もないのである。

会社の昼休みに、彼らはスシやチキテリを賞味しながら、同僚と、その夜のゲームについて、予想を述べ合う。話題の中心は、しばしば、〈読売ジャイアンツ〉の弱さであり、かつてのスーパースターの三塁手で現在は〈ジャイアンツ〉の監督としてわがビリー・マーチン以上の人気をもつシゲオ・ナガシマが〈何を考えているのか〉ということである。

午後五時か六時に退社するやいなや、彼らは電車にとび乗って、東京湾内の小島にある後楽園スタジアムに向う。混雑した駅（たしかスイドーブシといったと思う）でサイズの小さな夕刊二紙を買い、彼らはスタジアムまで突っ走る。

後樂園スタジアムは、グリーンモンスターのないフェンウェイ球場に似ている。グラウンドは合衆国の標準よりもやや小さいが、日本人の身長に合せて作ったものだから、いたし方ない。水に濡れた汚い廊下ぞいに売店があり、日本式ホットドッグを一ドルで売っている。そのほか、海草の粉末（訳注・青ノリ）をまぶしたフライド・ヌードルがあり、日本人は、ホットドッグより、こちらを好む。だが、日本人が本当に好きなのはシャブシャブであり、多くのファンはシャブシヤブを食べながら、試合を観ることを好む。

このような熱意に応えるには、日本の選手はあまりにも数が足りない。

そのために考え出されたのが〈ガイジン〉を呼ぶことであり、じじつ、多くの〈ガイジン〉が日本に呼ばれた。（ごくさいきん、筆者は、ロイ・ホワイトが日本へ行くという噂をきいた。スパーク・ライルがへつねに二割八分を打つ、ヤンキースでもっとも安定したバッター」と評したロイが、読売ジャイアンツに加われれば、読売ジャイアンツがペナントレースで抜きん出ること
は明白だ。なぜなら、読売ジャイアンツにはミスター王（原注②）がいるからである。）

優れた選手が、需要に応じて、二つの球団をかけもちするのは、人材にとぼしい日本では、ごく、ふつうのことであり、ファンも、そのようなことを咎めたりはしない。合衆国では考えられないことだが、極東の神秘的な国では、しごく日常的なのが、この選手のかけもちである。——たとえば、コージ・ヤマモトは広島東洋カープの四番打者であり、王とならぶほどのヒーローでありながら、時として、読売ジャイアンツの野手をつとめたりする。また、読売ジャイアンツの

投手であるスミは、ヤクルトスワローズの打者として優れたバッティング技術を披露するのを惜しまない。

それでは、読売ジャイアンツとヤクルトスワローズが対戦するとき、スミはどうするのかという疑問を抱く読者がいるかも知れない。アメリカ人ならば、当然、そう考えるであろう。スミが投げたボールをスミが打つ光景を日本のファンはたのしむことができる。日本のファンは、片方のスミが〈影武者〉であることを知り尽しているからである。〈影武者〉という伝統的な存在が、日本のプロ野球を、独特のものにしていることは、なんびとも否定できないはずである。

他の職業の人間が〈助っ人〉にくることもある。広島東洋カープ（シンシナティ・レッズのそれに似た赤いヘルメットとCのインシヤルがわれわれを驚かす）のエナツ投手が、スモウ・レスラーであることは、日本の野球ファンなら、だれでも知っている。たとえアメリカ人でも、スモウ好きの人が見るならば、エナツが真のスモウ・レスラーであることに容易に気づくにちがいない。彼はつねに八回ぐらいで登場する〈火消し役〉であるが、登場のさいにゆっくり塩をまき、さらに〈シコ〉を踏んでみせる。その上、マウンドに立つてからの〈シキリ〉が長い。これらはスモウ・レスラーの特徴である。

また高名なロシア文学者（訳注・江川卓氏のことか？）が、なぜか、新人投手として現れ、評判をおとすこともある。彼はプロになる条件として、牧場を経営できるほどの土地を要求して、大衆の反感を買った。東京、および、東京近郊の土地の値段の高さは、われわれの想像を絶しているからだ。

架空の人物が現実の存在となることもある。『鉄腕アトム』で知られたオサム・テヅカのヒットしたTVアニメーション『巨人の星』の主人公タブチクンがそうである。『巨人の星』は、阪神タイガースのリキイシ投手とジャイアンツの若き打者タブチクンの死闘を描いて、日本の少年たちをソニーのカラーテレビ受像機の前に釘づけにした。タブチ人形、タブチ・バット、タブチTシャツといったキャラクター商品が続々と生まれ、遂には、みずからタブチと名乗る選手が登場するに至った。このような在り方さえ許容するほど、日本のプロ野球ファンは寛大なのである。

ロバート・ホワイティング氏は『菊とバット』の中で、一八七三年、一アメリカ人によって日本にもたらされた野球が、武士道精神と結びつくことによつて、〈日本固有のゲーム〉に変質した、と断じている。

この見方は、いちおう、正しいかにみえる。われわれにとつて、野球とは、一八三九年にアブナー・ダブルディ少将が考えたものである。すなわち、アメリカ人が考えたゲームであり、これを疑う者はいない。もっとも、一七五〇年以前にイギリスでおこなわれていた〈ラウンダーズ〉というゲームを起源とする説もあったが、これは、とくに否定されている。

ソ連では、一時、ニコライ・ポポフというロシア人がシベリヤでおこなったゲームこそ、野球の始まりであるという説が教科書に採用されていた。ポポフがゲーム〈ポペスコ〉を考えたのが一八三八年——ダブルディ少将より一年早いというのが、この説の胡散臭いところであつたが、スターリン批判とともに、この説は、ソ連のあらゆる事典・教科書から消えた。

また、中国において《四人組》が跋扈^{ばうこ}していたころ、《棒球》（野球の中国名）は、一八一五年、清の時代に、広東の王丹緬という男が考えたという説が発表された。だが、文化大革命が批判されるとともに、この説も消された。

さて、以下に私が述べる説は、ポポフや王丹緬のそのような政治的必要から持ち出された珍説ではない。私はロバート・ホワイティング氏の説をさらに徹底させた。《日本の野球》は、アメリカの野球が武士道と結びついて変質したのではなく、武士道そのものである。——はつきり言おう。日本には、一八七三年以前から、野球が——げんみつに言えば《野球によく似たゲーム》が——存在していたのである。（こたわるようだが、あれほど日本のプロ野球にくわしいホワイティング氏が、なぜ、この事実に気づかなかったのか。私は不思議に思う。）

野球は日本語では YAKYU と発音される。俗説では、一八七三年以後に、ある日本人が YAKYU なる造語をもって、ベースボールに当てたとされている。しかしながら、私の研究によれば、YAKYU なる名は、はるかに古く、一六〇〇年代にさかのぼるのである。

はるかむかし、ヤマトノクニに YAKYU という一族が住んでいた。（訳注・これはおそらく柳生一族であろう。）ヤキユウ家は、トクガワの第一代將軍に仕え、將軍に劍の道を教えたといわれる。だが、それは表面の姿であって、ヤキユウ一族の野望は、彼らの家に伝わるゲーム《ヤキユウ》を日本全国にひろめ、普及させ、全国の大名たちにワールド・シリーズをやらせることにあったのである。

劍の道において、ひよっとすると、ヤキユウ家を凌ぐ天才が現れるかも知れない、というのが、

ヤキユウ家当主M・ヤキユウの不安であつた。しかし、ゲーム〈ヤキユウ〉ならば、どのチームにも負けない自信があつた。(トクガワ第一代將軍は、M・ヤキユウの考えの支持者だつた。なぜなら、ゲーム〈ヤキユウ〉には刀が要らない。將軍は〈刀狩り〉をおこない、日本中の刀を江戸の城の奥に隠してしまひたかつた。彼はまた、ゲーム〈ヤキユウ〉を Shōgun's Game、すなわち、オイエリユー〈お家流〉と呼んだ。)

野心家のM・ヤキユウは、冷酷な現実家でもあつた。弟の(訳注・?)ジューバー・ヤキユウが一六二六年から三七年まで、十一年間、行方不明になつていたのも、実は、〈ヤキユウ〉を普及させるべく、全国の大名を説得して歩いていたからだ。北九州のある藩でバッティング・コーチをつとめたさい、ジューバーは彼の命を狙う男から死球を顔にぶつけられ、片眼を失つた。

このゲーム〈ヤキユウ〉は、われわれのベースボールと、同じ人数、同じルールでおこなわれる。同じルールのゲームが、海をへだてた米日の二国に、なぜ発生したかは、文化人類学者の考察すべき問題であらう。M・ヤキユウの野望に反対したのは、意外にも二代目將軍ヒダタダであつた。ヒダタダは、〈ヤキユウ〉が嫌いである上に、M・ヤキユウの権力があまりにも大きくなるのを恐れたのである。ヒダタダの考える武士道は刀であり、M・ヤキユウの考える武士道は〈ヤキユウ〉であつた。

ヒダタダが〈ヤキユウ〉を嫌つたのは、いかに努力しても、〈ボールが見えてこない〉からだつたといわれる。(武士道としての〈ヤキユウ〉において、これは重大なことであり、現代のミスター王やコージ・ヤマモトも、しばしば、〈ボールが見えない〉〈見えてきた〉を問題にする。